東京都社会福祉協議会会長賞

母の手でつくりあげた「夏の幼稚園」

中川　ひろみ

あなたは子どもの頃、誰とどこで何をして遊んでいましたか？今の子どもは忙しい。小さいときから何かしらお稽古事に通い、仲間と時間を忘れて遊ぶことは難しくなっています。

夏は、子どもが大きく育つ時です。でも、地域に子どもの群れがない今、「夏休み」が近づくと、母親達の「あーぁ、夏休みが来ちゃう。毎日、困っちゃうなぁぁ」という声が聞こえてきます。夏休みだからといって、父親にそんなに休みがあるわけではなく、結局母ひとりの肩にすべてがかかってきてしまうのが現実です。「今日は誰とどこで何をして遊ばそうか…」と。

私達は今、地域に「子どもが主人公の居場所」をつくろう！と毎週金曜日と第二土曜日、日野市に残された緑地〝なかだの森〟で活動しています。子育て真っ最中の親達の

「もっと自然の中でおもいっきり遊ばせてあげたい！」という声から始まりました。毎回ほぼ四十組の参加があり、百人近い乳幼児とその保護者が〝なかだの森〟にやってきます。〝なかだの森〟では子ども達が、自分のペースで思い思いに遊んでいます。長い木の棒を集めたり、もぐらの穴を掘ったり、見つけた虫をつついたり、どろんこあそびや水遊び、そして木登り。毎回かまどで焚き火もします。親達は食材を持ち寄り〝なかだ鍋〟を作ります。子ども達は、その火のまわりで、薪をくべたり、うちわで扇いだり、薪割りのお手伝いをしたり……おもちゃや遊具は何もなくても、自然の中は子どもの想像力をふくらませるもので溢れています。そこで母たちも子育て仲間に出会い、子育ての事や自分自身の事を語り合い、支え合う関係づくりをしています。そして子育て中の親が自分たちで協力しあい「より居心地のいい場」にしていくために、自分のできること、やってみたいことにチャレンジしています。

今回はその中の「夏の幼稚園」の体験についてお話したいと思います。この取り組みは、二人目の子を連れて遊びに来ているお母さんの「地域にせっかくある〝なかだの森〟なのに、幼稚園に入ると参加しにくくなる。なんとか、幼稚園児が森で過ごすきっかけを

作りたい。夏休みにいつ行っても誰かと遊べる森にしたい。」というつぶやきから始まりました。

「やってみたい！」を形にするには、まず仲間集めです。ひとりでは何もできません。同じ思いの人を集めることから始めました。〝なかだの森〟に遊びに来ている人を中心に、色々な幼稚園に子どもを通わせているお母さん達と話し合う場を持つことにしました。ひとりのお母さんのつぶやきですが、予想以上に関心が高く「参加したぁーい」「遠くに出かけなくても自然の中でおもいっきり遊ばせたいと思っていた」「お手伝いします」という声をもらうことができました。

そして本格的に「夏の幼稚園」の準備が始まったのです。でもそこからが大変でした。一言に〝森で過ごす〟と言っても、そのイメージはまちまちで、やりたいことを整理して計画を立てていかなくてはなりません。別々の幼稚園に通わせているということは、普段の子どもの遊び方も、子育ての価値観も、少しずつ違うということです。その違いを超えて作り上げることが必要でした。それは、表面的な付き合いでは超えることができません。もちろん初対面の人もいました。「どんな場にしたいのか」そして「子育てで大切に

したいこと」を語り合う場になっていきました。遊びについて、子ども同士の関わりについて、安全管理について、食事について、兄弟について、話はつきません。事前準備は、参加者みんなでつくる居場所「夏の幼稚園」となっていくために必要な時間でした。大変だからこの程度でと妥協するのではなく、子育てをしている今だから大切にしたいことは何かを確かめあっているように見えました。親たちが事前準備をしている間、子ども達三十五人は「夏の幼稚園」がはじまる前から一緒に森で遊び、新しい友だちやボランティア・スタッフとの距離を縮めていくことができました。

そして出来上がったのが、土・日曜日のキャンプを含む五日間（8／4～8／8）のプログラムでした。大切にしたのは「子どもの群れ」と「大人の群れ」。親子プログラムというより、子ども同士の関わりを大切にし、大人は協力し合ってその五日間を支える。わが子もひとの子も育ちあう場にしたい。そのために経験豊富な保育スタッフが必要ということになり、NPOのつながりの中で保育スタッフを確保しました。

振り返ると、前日準備を終えた段階でお母さん達はかなり体力的に辛かったのではないかと思います。いくら森が公園より涼しいとは言っても真夏です。一日中屋外で話合いや

作業をするのは大変です。夏の森は蚊も多く、決して快適とは言えません。でもその疲れを忘れさせてくれたのは子ども達の生き生きと遊ぶ姿でした。

一日目〝なかだの森〟に住んでいる恥ずかしがり屋のカッパくんを探して、グループごとに森探検。お母さん達が創り上げたメルヘンの世界を、子ども達が膨らませていきました。二日目は竹馬作りと手作りピザパーティー。三日目は多摩川で泳ぎスイカ割りも楽しみました。そしていよいよキャンプ当日。この日はお父さんの参加も多く（二十二組中十四名）子ども達にとって、最高にワクワクする体験となりました。遠くに出かけて家族キャンプの体験がある人はいても、同じ世代の子どもを育てているたくさんの家族とのキャンプは初体験だったでしょう。まず、森で育てた枝豆を収穫。そしてみんなで夕飯作り。家ではお手伝いですが、この日は子ども達が主人公。頑張らないと夕飯が食べられません。仕事は山ほどあります。包丁を持つ手も真剣そのもの。かまどや森のお風呂焚きは、お父さん達の活躍の場でした。そして夜。キャンプファイアーの炎に照らされた子ども達はなんだかひとまわり大きく見えました。こんなにたくさんの大人達の温かいまなざしに囲まれ育つ子ども達は本当に幸せだなぁ。そしてその幸せな時間を共に過ごさせても

らってありがとう。子どもがいるからこそ、こんなにたくさんの人との「きずな」が生まれたのだと感じた瞬間でした。子どもだけのテントで保育スタッフと寝付く子もいて、親の方がびっくりするやら、寂しいやら。安心できる人の輪の中で子どもは親から少しずつ離れ自信をつけていきます。子どもが寝付いた後は、写真班のお母さん達が撮った子ども達の姿をスライドで見ながら語り合いました。その姿に思わず感激の涙も見せる人もいました。お父さん達はちょっぴりアルコールの力も借りて、お互いの距離を少しだけ縮めていました。夜が更けても、同じ時代に子育てをしている親同士の話はいつまでも続きました。

準備している時はずいぶん長く感じていましたが、始まってしまうとあっという間。とことん遊んだ五日間。たった五日ですが、思い出深い五日間となりました。今でも余韻が消えず「是非来年も！」という声があがっています。

今年、ひとりのお母さんのつぶやきから始まった「夏の幼稚園」。つぶやきを実現していく過程でＮＰＯとしてお母さんたちの意見調整をしたほうがもっとスムーズだったのかもしれません。ほとんどの親が幼稚園児と下の子を抱えて、プログラム作りから関わるの

は負担が大きすぎたのではないか?もっと時間をかけずに合理的に進める方法があったのではないか?と今でもこれでよかったのかと迷いもあります。しかしそのたびに、以前出会ったお母さんの「急がせないで!時間をかけて話し合うことに意味があるの。遠回りする方がいいことだってあると思うんだ。」という声が聞こえてきます。結果ではなく、話し合う過程が大切なのだと改めて気付かされた言葉です。

地域社会のつながりが希薄になっている現代、「きずな」を強めていくことは、決して楽なことではありません。しかし私は、子育て中だからこそ「わが子だけでなく地域の子ども達のために力を出したい」と思っている母たちのパワーに、明るい未来を感じています。地域に子育て中の人が活躍できる場とそれを支える仕組みを作ることが必要だと思います。これからも、人と人をつなぎ、育てていくことを通して「子どもがいるからつながる人の輪」を広げていく活動を続けていきたいと思います。